佐多稲子の『童話』から

五十嵐　福子

佐多稲子の短編というと、まず処女作の『キャラメル工場から』があげられる。ついで教材によく取りあげられている『水』『三等車』などがあげられるであろうか。みずみずしい現実感覚や、人間をみつめるあたたかさ、深さを漲らせている佐多の短編の魅力については既に多くの人の定評のあるところである。今回私もその短編の中から、一九五〇年八月に書かれた『童話』を取り上げてみたい。この作品は初めて読んだ時から、深く忘れ難く私の心に残っており、それがなぜなのかこの機会に考えてみたいと思う。

作品の中でひときわ鮮やかに浮かんでくるのは、北陸のもの静かな町に住む主人公親子のかわす短いひとときの会話である。それは作者と思われる「私」が主人公克子に会った日のことを回想している場面として出てきたのであるが、

「彼女が私に、その家の不幸について話していた時、二度目に階下から上って来たその男の子が、母を自分の方に引き寄せるように、小さな口を丸くあけて呼びかけた。その時のことをおもい出す。

『お母アま、きょう、映画、見にゆかっしゃらん?』

ねえ、お母アま、と、古風な言葉づかいで、母をゆするように言った。彼女は私に、今日からこの町に巡回の映画がかかっているのだと説明してから、子どもの方へ顔を向け、ううん、と小さく首を振った。

『お母アま、きょう、映画見に、ゆかん』

ゆ、か、ん、とやわらかな尻上りで、彼女も古風な言葉になっている。子どもはそれを追うように、

『あしたは、映画見に、ゆかっしゃらん?』

『あしたも、ゆ、か、ん』

『あさっては、ゆかっしゃらん?』

『あさっても、ゆ、か、ん』

母は歌うような調子で否定しつづけた。

すると男の子は、ふうんと、投げ出したように、

『そんなら、いつか、映画見に、ゆかっしゃれ』

と、他のいたずらに移った。それは悲しい、美しい画のように私の心に残った。その言葉が古風に優雅であったからでもあろう。この部分だけ読むと、いかにものどかな平穏な親子の日々が想像されるし、北陸なまりの美しいことばの余韻が心に触れてくる。しかしそのすぐあとに作品はこう続いている。

「彼女は男の子が聞いているのも気にかけぬように大人の話題にかえって、男の子をかえり見た。

『夫のような病気は、遺伝だということですから、子どもたちに責任を感じるのですよ。それも子どものときには普通の子と変りなくて、ある時期から成長がとまるのだそうですから、この子だって、どこまで成長するか、見とどけてやらなければならないのですの』……」

先ほどの美しい親子の会話の背後に、こうした恐ろしい不幸の影が横たわり、この暗い影ゆえにこの親子の会話はいっそうもの哀しい美しさを帯びてくるのである。

1

主人公の克子は北陸の古い町で、一か二かといわれる大地主の妻女である。「私」がその町へ出かけてゆき、迎えに出てくれた彼女に初めて会った時から、彼女は古びた町の色合いやそのしきたりになじんでいないものを感じさせた。「無邪気で超然とした画かきらしい人」と描かれており、連れていた五歳くらいの男の子の母親らしくさえなく、むしろ仲の良い年の離れた姉のように見えたという。彼女の住む大きな格子造りのどっしりした家が代表する、古く沈んだ周囲の雰囲気に、全くそぐわない克子のイメージに「私」は不審を抱きつつ、彼女との親交を深めてゆく。その疑問もやがて明らかになるのであるが、それは思いがけない彼女の不幸が原因していた。

克子の夫は子供の時に発育が止まってしまうという病気であった。

彼女は女学校を出て十八歳で嫁がせられ、それによって実家は巨額の借財を切りぬけた。その話を克子からきいて、「私」は大きな家の中の、何か音をたてない陰うつなものが初めて理解された。そしてその家には主人らしいものの気配のないのを不思議に思っていた「私」は、思いがけずその主人に会ってしまう。厠へ行った帰り、この大きな碁盤の目のように造られた家の中で迷ってしまった時開けたある部屋に克子の夫がいたのである。

一人でしーんと坐っていた小さい青い顔——それは克子の連れていた男の子によく似ていたが、気負った肩つきや表情にいかにも町一の旧家の主人らしい構えをみせていた。襖をあけられても動じないその視線に「私」は冷ややかな敵意さえ感じる。彼女の夫は戦時中は名誉職にひっぱり出されたが、今は麻雀ばかりしているという。愛情のない結婚、その上に人間らしくあたたかくつながれるものが初めからなかった夫婦の姿が思い浮かぶ。町で一、二といわれる地主の家に生まれたことが、克子の夫から人間らしい優しさなどをいっそう奪ってしまったのではないだろうか。ひっそり静まりかえった大きな家の中で妻や子供とも親しく交わることもなかったろう日々。その日々が麻雀ばかりで費されるというところに、心の氷るようなものを感じるのは私だけであろうか。

克子はそういう生活の中でなんとか自分を見失うまいと願いつつ生きてきた。そして死さえ思う日々の中で、彼女を支えていたものは、子供と絵だったのである。「絵をかきはじめて、ようやく生きる支えを見つけたような気がして、すがっているのですわね。」と克子はいう。彼女は子供たちについて東京に出てきていた時期があり、その後正式に夫と離婚する。大人たちから入智恵された子供たちは、克子と共に暮らしていた家から一切のものをもって田舎へ引きあげていった。彼女は家だけ自分のものになるが、全くわが身一つで新

しい生活を始める。特殊喫茶や貸席で皿洗いをしたり、似顔絵をかいたりして暮らしてゆくが、子供の去ったあとの空白を埋めるように次々とほとばしるように生まれてきたのが童話であった。小さい動物たちが美しい世界に憧れ、優しさをこめて援け合ったりしたことがいくらでも湧いてくるらしい。「あとからあとから、いくつでも出てくる彼女の童話は、ひとりきりの夜の時間に、彼女を襲ってくる愛情の波しぶきなのであろう」と「私」は思いやる。

今、この作品を読むと「女の自立のむずかしさ、辛さ」が深く心にくいこんでくる。経済的な問題はともかく、それ以上に心の支えをどう求めてゆくか、そして子供の存在とどう関わってゆくのか。

「私」が彼女に初めて会った時強く抱いた印象——周囲の古びた街や生活の色合いに染まらない彼女のイメージは、彼女が嫁いだ日からずっと抱いてきた思いが作り出してきたものであることが想像される。愛情のない結婚、しかも金で買われた花嫁の桎梏を背負って耐えてきた思いである。そこに住み、そこで子供を生み育てながら、生活の根をどっしり下ろすことのできない女の哀しみが、彼女のこの不安定な、周囲へのそぐわなさを作ってきたのである、それは反面、彼女の中に人間らしい生を生きたいという欲求が粘り強く生き続けてきたあかしともいえる。

彼女はこの状態からの脱出をどんなに願ったか。けれど、この家を脱け出すことは、同時に子供との離別を意味していた。夫が大地主という経済力にものをいわせて、子供を一人も手離さないことは彼女も予想していたと思う。離婚が決まり、東京の家を子供たちがひきあげる時、何一つ残さずに子供たちが帰っていったことや、送られてきた彼女のタンスにはなかみが何もなかったという冷酷さを主人の冷ややかな印象と重ねるとき、彼女の耐えてきた思いの深さがまざまざと伝わってくる。そしてこれから先、この夫は子供たちに父親らしい愛情をふり注いでくれるのであろうか。この一点をとっても克子の子供への思いは残る。

夫との愛のない生活の中で彼女がじっと耐えてこられたのは、子供たちとの日々があったからではないか。彼女の失われた青春の貴重な代償として子供はかけがえのない重みを占めていたであろう。しかしその子供との絆を断ち切ってしかここからは脱出できない。新しい人生はつかみとれない。克子がどんな思いでこの決意をしたかは作品の中に直接述べられていないけれど、子供たちが去ったあとの心の空白、喪失感が、彼女の受けた痛手のいかに深かったかをもの語っている。

克子はのめりこむように童話の世界に入りこんでゆく。克子のかく画は、東京の街を描きながら、みんなやわらかい色合いで描かれて童話のようであった。

「ごたごたしたその部屋には、もう去って行った彼女の子どもたちの残した空気は何も残されていはしない。彼女はいわば、彼女の観念の中で、子どもと住んでいる。そして夜半に、いくつもいくつも子どもにお話を聞かせ、いつか彼女の感覚そのものが、子どものものになっているというのである。」

主人公の大きくみひらかれた目の中にいくつもの悲しみの影が漂っており、その悲しみによっていっそう彼女の心は澄みきってゆくようだ。

2

作者は克子の生の全体をすっぽりと掬いあげている。しかも克子の人生の特異なところに焦点があるのではなく、もっと女の人が共通して背負っている問題をひき出している。苦しみつつ自分の人生をつかみとる克子のような人生が描けるのも、背後に作者自身の人生があるからではないだろうか。

作者自身、初めての結婚は資産家の息子の嫁にと見込まれて玉の輿のような結婚であり、病的に人が信じられない夫との愛のない生活がどんなものであるか痛切に体験している。また離婚により、作者は幸い子供を手離す痛みは味わなかったけれど、離別のもっている不幸や、女が一人で生きてゆく苦労をわが身に引き受けてきた人である。そういう作者であって初めて、克子の生がこのようにひろやかにうけとめられえたのだと考えられる。

しかも、佐多稲子の作中人物たちは、作者の主観や恣意によってそこなわれることがない。ありのままのいきいきとした姿でいつも存在している。『童話』のように作中に作者らしい「私」が登場していても、作中人物を自分の主観でみつめることがほとんどない。

それを強く感じたのは、『網走まで』という志賀直哉の作品を授業でやってみた時であった。『網走まで』は数年前、筑摩書房の高一の教科書に取り上げられていた。主人公が列車にたまたま乗り合わせた母親と子供の姿を描いた作で、佐多稲子の『三等車』によく似た素材を扱っていた。

『網走まで』の母親は、若く、優しく、二人の幼ない子供を連れて遠く網走まで旅することが痛々しく思われるような女性である。一方彼女の連れている男の子は「顔色の悪い頭のはちの開いた妙な子」であり、「私」を「いやな目つき」で見たり、母に次々とだだをこねて困らせる子として描かれている。そして作者はここに不在の夫を大酒飲みの、弱い妻に当たり散らす男だろうと想像し、この家族の不幸な将来まで思いを馳せる。

作者は自分の感性できっぱりと好悪を決め、的確な描写の中に鮮やかに母子の姿を描いており、志賀ならではの魅力の漂っている作品である。けれど人物の描き方はどうだろう。作者は上品な若い母親に同情はしていても、彼女の生活全体を思いやるわけではない。たまたま自分の好みに合った若い母親への好感が、ひとときの心の交流を生み、作者の想像をかきたてたにすぎない。

これに比べ『三等車』にはもっとふくらみがある。鹿児島までゆく夜行列車に乗り込んだ親子全体をあたたかく包みこむ作者の目がある。東京での生活の厳しさに耐えられず、母子だけ田舎に帰ってせめてお餅の食べられるお正月を迎えたいという家族の様子を描いている。さっきまで、夫婦のいさかいが続いていたらしかったが、見送りの父をみると、列車の窓枠にズックをのせて外に出ようとする男の子。汽車の音響に合わせて「父ちゃん来い、父ちゃん来い」とつぶやく子供の心の中には、親子で築いてきたあたたかい家庭のあったことが伝わってくるし、それがまたこんなふうに壊されてしまう切なさも訴えている。作者が心の中にくりひろげる世界のすみずみにまであたたかい心配りが感じられる。夫が家に帰ってからのことを「私」は思う。

「この朝慌ただしく出ていったあとがまだそのまま残って、男の子のメンコなどが散らばっているかもしれない。彼はそれを片づけながら、ちょっと泣きたくなるかもしれない。口紅がずれてついていた妻のつんと口を尖がらして横を向いていた顔が、苛々と目の前に出てくるだろうか。彼はひとりでふとんを引きずり出して転がり込む。ふとんの襟に妻子の臭いも残っている。彼は彼の方に出ようとして汽車の窓に片足をかけた小さい息子のズックをおもい出すだろうか。その時もうこの汽車は山陽線のどこかを走っている。彼はもうすっかりひとりになった実感におそわれて、ふとんの襟をやけに頭の上にずり上げるだろうか。」

作者は自分の好悪など前面に出さず、汚いものも、未熟なものもひっくるめて掬いあげている。その中にひそむ美しいもの人間らしいものをみつめている。

志賀がもし『童話』の中の子供をみたら、恐らく『網走まで』の少年に似た陰気で気むずかしい様子をクローズアップするのではないだろうか。佐多はそういう点も書きとめながら、冒頭にあげた子供らしさの漂う母子の会話を作品の中にきちっとはめこんでいる。あそこでこの子供は生来のいかにも子供らしいあどけなさや優しさをその身に漂わせることになる。

佐多のこうした、あたたかく人を抱えこめる資質は作品の中に多くの人を気持よく入りこませてくれる。

これは作者からいつかお聞きした話であるが、ある未知の女性から電話がかかってきたことがあった。「佐多先生のお宅ですか。」と問われ「はい、佐多です。」と答えたら、相手は声をつまらせてしまったそうである。電話にすぐ佐多氏本人が出ることを予想していなかったのであろう。そしてなぜ電話をせずにいられなかったかを、わが身の抱えきれない深い悩みを語ったそうだ。作品を読んだだけで、この作者ならきっと私の悩みをきいてくれるだろうと深い信頼を寄せる読者の気持が私にもよくわかる。思えば私が佐多稲子を卒業論文のテーマに選んだのもそこだったように思う。ふところの広さとでもいおうか、他人の心をゆったりと受けとめる柔軟さがあり、しかもその背後には自己を厳しく律する姿勢がある——そういう人柄をぬきにしては、『三等車』や『童話』のような作品は生まれてこなかったと思われる。いろいろな人との出会いやできごとを文学云々をぬきにして、生活者としていきいきとたっぷりと味わい、生きてきた人であって初めて生まれた作品なのである。

『童話』の魅力もそういう佐多の世界を母胎としているところから生まれてくる魅力に充ちている。

たとえば次のような場面。克子の事情を知っているある女性が、克子のことを非難して、夫のことを「不具者といっても、ただ、お小さいということだけです」というところがある。それをうけて「愛情のない感覚に、それがどれほどのものか、その女性はわからないらしかった。」と作者は続けている。短いひとことではあるけれど、深く真実をいいあてている。しかも愛や人生を浅くしかつかんでいないことばの冷めたさをぴしっとはね返す強さをもっている。愛のなさが、どんなに人の心を蝕むかを十分に知った作者であって初めて発しうる重みをもったひとことだと思う。こうしたことばでうけとめうるところに、いかにも佐多らしさを私は感じる。

また、「私」と克子が話している場面で、「六畳の部屋にもどって、お茶をのみはじめたとき、庭のつづいた隣家で、女同士の話し声が聞えた。その話し声が、強い陽の当った庭先きに、あんまり高くひびいたので私たちはふと話しやめて、それを聞くともなしに聞いていた。それは、こう言っていた。

『まあ、聞いて下さいよ、いちばん小さい男の子ったら、僕は建築家になるんだって言いましてね、お母ちゃん、待ってなさい、僕が大きくなったら、もっと大きな家を建てて上げるからって、そう言うんですよ。何年、先きのことでしょう。この家があんまり小さいものだから』

そう言って幸福そうな笑い声を立てた。

克子は、首をかしげ、不思議だというように、

『どこの親も、わが子の自慢をしますね』

そしてまた、これも不思議だというように、

『おかしいですね、子どものことを考えると、すぐ、胸がきゅうっ、となるんですよ』

『きゅうっ、となる』胸の痛みが、あんまり、てきめんで奇妙だというように、肩をすぼめて、その、きゅうっ、の形容を、身振りでして見せた。」

ふと聞こえてきた隣人の会話。手離しで子供を自慢している幸福な情景。その幸福を失ってしまった克子の心をよぎる思い。作者の目は鋭く、この時の克子の胸を襲うものの重たさ、切なさをぴたっと描きとめている。克子に辛い悲しいと語らせる以上に、この描写は効果的だ。

さりげなく見過ごされがちなこうしたいくつもの情景が作品の隅々で光を放っている。特に『童話』の中では、女として、母としての細まやかな心情に触れるものが多かった。作者によって切り取られた人生はあたりまえのようで、そのあたりまえの人生をいきいきと豊かに生きることの大切さを改めてみつめさせられる思いがいつもするのである。

3

最後にこの作品世界に漂う美について触れておきたい。

この作品が忘れ難く残るのも、はっと胸をつく美しさがあるからではないか。それは同じ作者の短編『人形と笛』などと同質の美といえる。『人形と笛』は鳴子で、優しいこけし人形と人形作者に出合い、その夜美しい音色の笛を聞く。ふとみかけたその笛の主の按摩さんの顔がひどく醜悪であったことが語られている。

『童話』の場合も、克子の生き方や克子のつかんだ世界が美しく映じるのは、それ以前の克子の暗い日々との対比が読者の心の中で行なわれるからである。どちらも美と醜が背中合わせになって、独自の美の世界を作っている。それは美と醜との緊迫した結びつきによって生み出される美であり、翳をもった鋭い光に心が貫かれるような美しさである。現実とはどこか切れた、幻想的な美の世界のように思われる。

もっと具体的に『童話』の世界の美しさについてあげてみると、まず北陸という舞台の美しさがあげられる。といっても作品に北陸の町の様子が詳しく描写されているわけでもないし、雪の舞う北国

らしい情景も語られてはいない。けれど北陸らしい雰囲気が漂うのは、一つには、作中の克子のことばや子供のことばの北陸なまりがあげられる。しっとりとした北国らしい風情がその古風なひびきにはこもっている。

もう一つは克子の暮らしていた家の様子である。大きな家で、碁盤の目のように部屋がたくさん並び、どの部屋に誰がいるのかもわからない。彩色の鮮やかな郷土玩具のしまいこまれた部屋もある。暗く陰気ではあるがいかにも北陸の旧家らしいたたずまいが感じられる。

くすんだ淡い色合いの背景が他の風物を生かすように、この作品でも北陸のイメージは大切な役割を果たしている。克子の悲しみや克子の童話の中に生きる姿をくっきり映じさせるのも、この北陸のイメージを土台としているからではないか。しかも北陸の風土そのもののもつかげりと哀調が美しい。

その古風なカンバスに描き出された克子の生そのものの美しさもとりあげねばならない。彼女のひたってゆく童話の世界はのびやかに描写されている。

「彼女が帰るとき、丁度雨が上り、薄もやが立ちはじめていた。雑木林の多い家の前では、低い林の間にも靄が流れいり、ゆるく動いている。樹々の間を縫って靄の動いてゆくのは、水の動きに似ていた。靄の色は、三日月の淡い光をこもらせて薄むらさきに明るかった。彼女は黒いレインコートの、これも踵につくほど長いだぶだぶのをきていて、彼女はそれをきるとき、おとぎ話の魔女みたいでしょう、と笑ったが、髪を肩に垂らし、その黒い、長いレインコートを引きずるような姿で、靄の中を歩いてゆくのは、全く、おとぎ話に挿入された画を連想させた。

彼女は、見送って立っている私の方を振りかえり、あたりを見廻すようにして、

『何か、水の中を歩いてゆくみたい、ですね。湖水の底か何か…』

そう言って、とことこと歩きつづけた。」

彼女を包んでいる童話的世界はまさに彼女の心象風景そのものである。作者は克子の心の中に深く入りこんでゆく。また入りこむことができる。作者の感覚の中に克子の世界に深く共鳴するものが感じられる。佐多はしばしば彼女の作品の中でこうした世界に触れさせてくれる。現実と切れて、感覚だけで憩う世界。澄明な幻想でみたされる世界とでもいおうか。

たとえば『わがはしがき』という作品の中の「白衣の少女」という一章を私は思い出す。

長崎での幼ない日々を追想している作品であるが、早春の夕暮れ時、父や母と連れだって居留地を通りかかった。窓をおろした暗い家の門口に、真白な洋装の外国の少女がたたずんでいた。近づくとその少女は、桃われの三味線をかかえた日本の娘としゃべっていたのである。「私」は好奇心と羨望とを感じてみつめていたが、やがて母に呼ばれて駆け出していった。そのうしろから外国の少女がはしやいで「私」の名を呼ぶのをきいた。早春の花の香の漂う夕暮れどきのその情景は、幻のように不思議な美しさで作者の心に刻まれているのである。

異国の香りをもつ長崎ならではの美しい想い出であり、その香り

が佐多の中の幻想的な美の世界を十分はぐくんだであろうことがうかがわれる。佐多稲子というと、いきいきとした現実を描くことがまずあげられるけれど、こうした幻想の世界を豊かにもった人であることを『童話』は伝えてくれる。最近の作品では『哀れ』や『女の宿』にその美の世界はうけつがれてゆき、もっと人生の陰影を重ねたものとして深まっていっている。

いろいろな角度から『童話』を眺めてみると、私が冒頭にあげた母と子の美しい会話は改めて『童話』の世界を象徴した部分といえるようである。子供との深い絆を絶ち切って、自分の人生を歩き始めた克子の心を包む童話の世界。その世界はこの親子の作り出した美しい時間にぴったり重なってゆく。そして克子はこの親子の美しい時間にかわるものを、これから必死に求めてゆかなければならないのである。

私はこれからも『童話』というと、やはりこの古風ななつかしさのこもる親子の会話をまず思い浮かべることだろう。

（埼玉県川口女子高等学校教諭）